

第 54 回 2014 春 — 源泉の話

2014 年の冬は、昨年の長期予報で日本付近に北極からの寒気が南下しやすいため寒さが厳しいといわれた通り、2012 年から引き続いての 3 年連続の寒冬になった。この冬は仙台でも筆者のこれまでの記憶にないほどの降雪量がみられた。1 月の大雪の時は屋根からの落雪で拙宅の庭にある二階窓の高さまで伸びている数十本の南天を支えている青竹の柵を倒し、梅や百日紅などのかなり太い木枝を折るなどの被害をもたらした。そのため大雪のなかで植木屋さんのお世話になったが、これもこれまでになかったことである。

3 月になって漸く庭の雪が消えた。自庭の梅ノ木は花芽や葉が出るのが遅く、出ても例年より数は少ないうえに貧弱で小さく、一応花が咲いたと認められる 9 輪の開花が揃ったのは春の彼岸過ぎの 3 月 25 日のことだった。その日は東京では桜開花が報道されていた。仙台での桜開花は 4 月 7 日であったが、今年の桜は梅とは対照的で例年になく美しく豪華でしかも長い間楽しむことができた。

自宅から数十 m のところに小さな公園があり、そこには数本の樹齢数十年と思われるソメイヨシノがある。とくにこの花は咲く時期が早く、桜色といえばソメイヨシノの花の色であるとされるほど美しく、散るまでの時間がほかの桜よりも短いなど、風情が日本人の気質に合っている。その公園には珍しい桜があると聞いたので早速行ってみると、遠くから見たのではよくわからなかったが、近づいてみると淡い黄緑色の花びらの中心部が赤い花を咲かせた樹があった。その花はあまり目立たないため、これまで何気なく通りすごしていたが、それが御衣黄桜というサクラで、京都の仁和寺から広まったものであると聞いた。恥ずかしいことだが、そのようなサクラが身近にあることを初めて知った次第である。

閑話休題。最近昔の書類や手紙類を整理していたとき、雑然とした本棚のなかにすでに故人となった両親や兄弟の写真や雑書類などが見つかった。それらのなかに長兄からの一通の手紙があった。平成 8 年 8 月 15 日の消印のある封筒の中には新聞記事らしいもののコピーが折りたたんであり、余白は長兄自筆の文章で埋まっていた。地域新聞と思われる新聞劇場「泉」という新聞名の下に印刷してある番号に電話してみたが不通だったので、いくつかの報道関係者に問い合わせしてみたところ、その記事の資料は泉区役所にもあるということがわかった。

その記事にはかつて銀行員であった筆者の父が事業を行った炭酸水と炭酸ガスが湧く井戸があった土地のことが書かれていた。記事には「繁栄の時、今に伝えて；実沢戸平に残る井戸—当時の花形産業支え」という表題のあとに「仙台市泉区で第二次世界大戦(太平洋戦争)終戦の前年まで、地元で湧き出る天然の炭酸水とガスを使い、炭酸飲料のサイダーと

が製造されていた。その味を知る人は少なくなったが、今も残る井戸だけは、炭酸飲料で栄えた時代を現代にしのばせてくれる(小谷野太郎)」という序文があり、続いて本文記事が掲載されていた。記事には「今でも残っている炭酸水が湧き出していた井戸」として写真も掲載されていた。泉区実沢戸平というところは、仙台市の旧市内から北に山を超えて山の裾野から続いて平地になったそれほど広くはない七北田川沿いにある地域である。川の南岸にあたる川沿いの山裾に続く平地に炭酸鉱泉があったが、そこからやや高くなったところに木造の家屋が残されており、筆者は祖母と3歳年上の次兄(故人)とともに太平洋戦争末期の昭和20年(1945年)7月10日の仙台大空襲の翌日から翌年春まで疎開したのである。その場所で筆者は当時国民学校といった小学校3年生から4年生にかけての時期を過ごした。炭酸鉱泉の井戸は当時その土地の人々には「源泉」とよばれていた。掲載されている「炭酸水が湧き出していた井戸」は、筆者の69年前の記憶のものとは全く異なっているのは当然ではあるが、何故かひどく懐かしく思われたのである。その源泉の井戸は二つあり、当時、ひとつは小屋というよりもしっかりした建物のなかにあり、ほかのひとつは疎開した家から近くの階段とはいえないような坂道を降りたすぐのところの小屋の中にあつた。疎開している間われわれ兄弟も水汲みをよく手伝ったものである。

仙台の炭酸水製造業の大日本鉱泉株式会社が大正8年(1925年)その「源泉」の土地に工場を建て、炭酸飲料の製造を開始した。父は、昭和13年(1938年)大日本炭酸合資会社となっていたその会社に七十七銀行東京支店より転勤となって最初の支配人として出向したが、昭和15年(1940年)銀行より会社を買い取り、みずから事業を始めた。仙台市中央部に本社を作り、社名を「ユニック炭酸合資会社」と改め、源泉の工場もフル稼働して清涼飲料水や炭酸ガスを製造した。炭酸水、サイダー、ラムネ、ジンジャールなどの清涼飲料水はユニックタンサン製品として仙台市内のホテルやバーに出回り、さらにミネラルウォーターとして帝国ホテルで飲料水テーブルウォーターに供されたという。瓶詰めされた炭酸飲料は当時一時的ではあるがシンガポールなど東南アジアにも輸出された。

第二次世界大戦末期には炭酸ガス製造工場の機械類は供出されて、源泉地には辛うじて小規模の清涼飲料水製造工場だけが残された。筆者が疎開したときにはそのわずかばかりの機械類が残されていただけで、しかも工場は休止状態だったためにその地域全体が廃墟のように見えたのである。終戦直後の混乱期1年足らずの間、工場が再稼働されたという思い出はない。源泉工場での製品は七北田川の橋を渡らなければ運び出すことができないため、昭和22年(1947年)キャサリン台風や翌年のアイオン台風による被害で橋が流されてしまい、営業を続けることができなくなった。父は、清涼飲料水製造工場を仙台の自宅地に移し、やがて再びユニックタンサンのラベルで炭酸水、サイダー、ラムネなどの製品を売り出した。筆者には製造工場が仙台市内の自宅に移ってからの記憶が強い。十代の夏、工場が忙しい時期にアルバイトをしたことが思い出される。サイダーや炭酸水の製造の最終過程で瓶詰め後王冠栓をする器械操作は手動であったが、そのテクニックをごく短期間でマスターし、感心されたことを思い出す。やがて日本の清涼飲料水製造業はコカ・コーラの出現により、多くの中小企業が廃業にいたるのであるが、父の会社も倒産してしまったのである。

長兄の手書き文には、「・・・ユニックタンサンの製品は荒町の王冠サイダー(他社の製品)とともに七夕祭りや日米野球などで盛んに出まわったものである。高松宮殿下お手植えの松もある(場所不明)・・・。」などという下りもあった。

少年時代に筆者は、企業をおこして経営を安定的に続けていくということに苦勞した父を見ていたためか、父と同じような職業には就くまいと決心していたように思う。